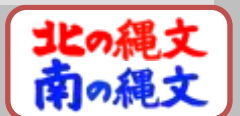




北と南の縄文文化



- 主催 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 共催 (公財) 鹿児島県埋蔵文化財調査センター



本日の日程

- 13:30 開会のあいさつ 所長 井ノ上 秀文
- 13:35 南の発掘調査報告
「見帰遺跡」 武安 雅之 文化財主事
「中津野遺跡」 光永 誠 文化財主事
「報告書等の成果」 永濱 功治 文化財主事
- 14:30 北の発掘調査報告
「宮城県気仙沼市における震災復興支援」 . . . 西園 勝彦
(気仙沼市への派遣職員)
- 15:15 北と南の縄文文化
「北の縄文文化」 平 美典
(岩手県への派遣職員)
「南の縄文文化」 東 和幸 調査第一係長
質疑応答 堂込 秀人 調査課長
- 16:30 閉会

資料集目次

南の発掘調査	
見帰遺跡	1
中津野遺跡	3
報告書等の成果	5
北の発掘調査	
宮城県気仙沼市における震災復興支援	7
北の縄文文化	15
南の縄文文化	29
用語集	37
遺跡位置図	39

ごあいさつ

本日は、「かごしま遺跡フォーラム2013 ～北と南の縄文文化～」に、ようこそおいで下さいました。

このフォーラムは昨年度、鹿児島県立埋蔵文化財センター設立20周年を記念して開催したのが始まりで、今回は2回目ということになります。今回は「北と南の縄文文化」というタイトルで、北と南の文化の多様性について発表いたします。

先の東日本大震災から2年半が経過し、様々な復興が進んでいく中、鹿児島県立埋蔵文化財センターは発掘調査関連業務で2名の職員を派遣し、復興支援に取り組んでいます。発表ではまず「南の発掘調査」としまして、昨年度から今年度上半期までの鹿児島県内の発掘調査成果の一部を報告いたします。次に「北の発掘調査」としまして、復興支援に関わる発掘調査の現状について報告いたします。そして最後に北と南の遺跡を比較し、それぞれの遺跡の共通性と多様性について発表いたします。

北と南の異なる自然環境の中、先人たちはどのように考え、工夫し、生きてきたのかを会場の皆さま方とともに考え、未来に生きるヒントを得る機会になればと願っております。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

平成 25 年 10 月 26 日

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 井 ノ 上 秀 文

みかえり 見帰遺跡

武安 雅之（調査課第一調査係）

- 1 所在地 志布志市志布志町志布志
- 2 地形 標高約 70mの台地上
- 3 調査期間 平成 25 年 4 月～平成 25 年 9 月
- 4 層位 表 1
- 5 主な成果 表 2
- 6 概要

見帰遺跡は、志布志市街地から北におよそ 3km、標高約 70m の台地上に位置しています。丘陵地を土地改良で平坦にしているため、場所によっては年代の古い層位が表土のすぐ下に位置する場合があります。また、西側を安楽川が流れており、急峻な谷地形も近くにありま

す。調査の結果、旧石器時代細石刃文化期、縄文時代早期から後期の遺構・遺物が出土しました。旧石器時代細石刃文化期（約 15,000 年前）はハンマーストーン、敲石などが、縄文時代は早期（約 8,000 年前）の遺物として石坂式・下剥峯式土器などの土器をはじめ、石鏃、磨石、石皿等の石器と、遺構として集石 1 基が、前期から中期（5,500～4,500 年前）の遺構として落とし穴状遺構 2 基を検出し、後期（約 3,500 年前）の遺構は溝状遺構 1 条を検出し、遺物は磨消縄文・丸尾式・中岳Ⅱ式・西平式土器などの土器が出土しました。



図 1 見帰遺跡の位置

表 1 見帰遺跡で見られる地層

層位	色調	遺物	層厚
I 層	表土		50 cm
II 層	黒色土	縄文後期	15 cm
III 層	黒褐色土(御池火山灰?含む)		15 cm
IVa 層	黒色土	縄文前中期	10 cm
IVb 層	軽石混じり黒色土(池田降下軽石含む)		10 cm
V 層	茶褐色土		5 cm
VIa 層	黄橙色腐植土(アカホヤ腐食)		15 cm
VIb 層	黄橙色砂質土		10 cm
VIc 層	橙色パミス(アカホヤ火山灰)		10 cm
VIIa 層	黒色土	縄文早期	20 cm
VIIb 層	黒褐色硬質土	縄文早期	20 cm
VIIIa 層	明黄褐色土(薩摩火山灰)		30 cm
VIIIb 層	茶褐色硬質土		10 cm
IX 層	褐色粘質土	旧石器時代	20 cm
X 層	暗褐色粘質土	旧石器時代	15 cm
XIa 層	黄褐色土		20 cm
XIb 層	黄褐色土(黒色硬質ブロック土含む)		15 cm
XII 層	黄褐色軽石混じり土(2次シラス)		—

表 2 主な遺構と遺物

時代	検出遺構	出土遺物
旧石器時代		剥片, 打面調整剥片, ハンマーストーン, 敲石, 磨石
縄文時代早期	土坑 10 基, 集石 1 基	石坂式土器, 下剥峯式土器, 石鏃, 磨石, 石皿
縄文時代前～中期	落とし穴遺構 2 基, 土坑 1 基	
縄文時代後期	溝状遺構 1 条	磨消縄文土器, 丸尾式土器, 中岳Ⅱ式土器, 西平式土器
時期不明	溝状遺構 1 条, 土坑 2 基	

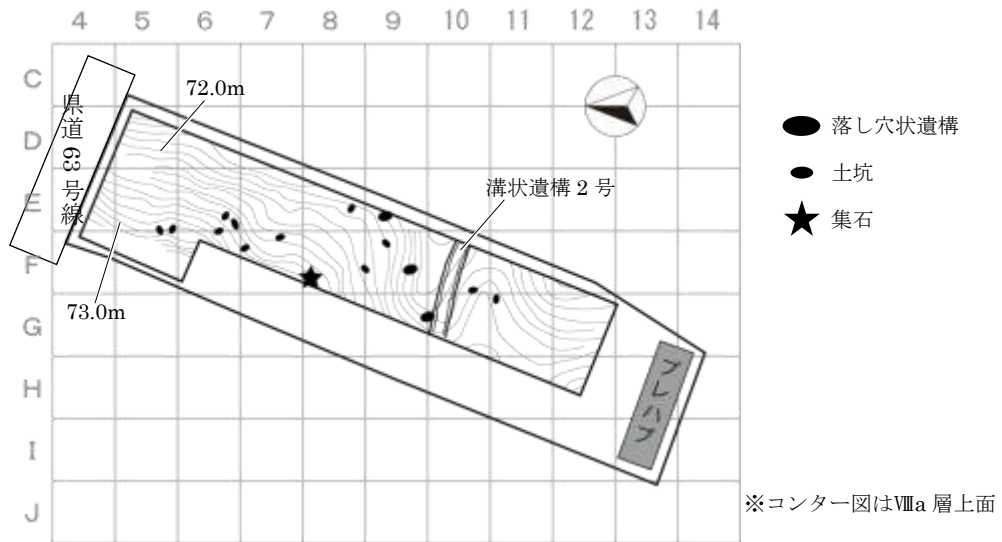


図2 遺構配置図



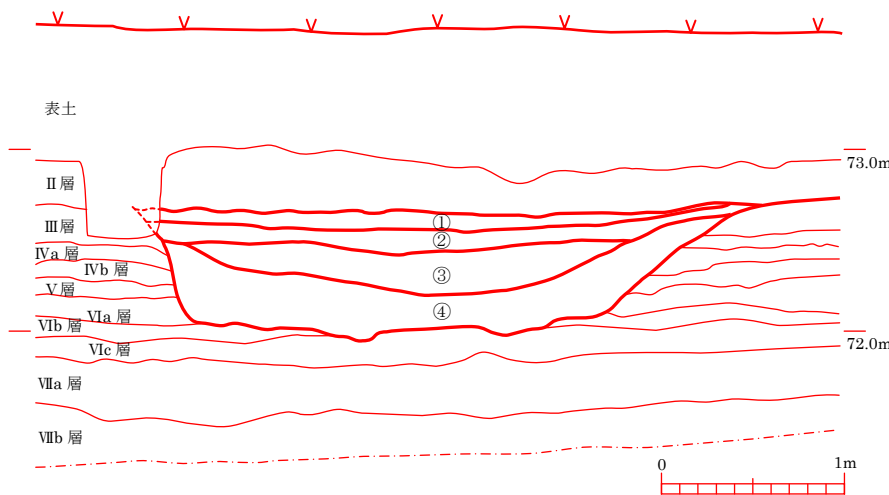
集石 1号



落とし穴状遺構 1号



溝状遺構 2号



御池火山灰の量が①から④にかけて次第に多くなっている。また、④では、①～③に比べて粒子が大きくなっている。
 ③・④では池田降下軽石と思われる粒子を含んでおり、その量は④の方が多。
 ④では、両側の斜面に沿って御池火山灰が多量に堆積しており、上部からの流れ込みによるものと思われる。

調査区西側土層断面における溝状遺構 2号の埋土の状況

図3 遺構



] 1cm

図4 溝状遺構 2号内遺物

なかつの 中津野遺跡

光永 誠（調査課第二調査係）

- 1 所在地 南さつま市中津野（図1）
- 2 地形 標高約9mの段丘面
- 3 調査期間 平成25年6月～平成25年10月
- 4 層位 表1
- 5 主な成果 表2
- 6 概要

中津野遺跡は東シナ海に注ぐ方之瀬川の支流である境川が形成した沖積低地、河岸段丘、そして台地上に立地しています。本年度は段丘面の一部を調査しました。

調査の結果、縄文時代後期（約4000年前）から近世（約300年前）にかけての遺構・遺物が発見され、縄文時代より今日にかけて長い間人々が生活していたことが分かりました。弥生時代（2500年前）では、復元すれば1～2個体になると思われる土器が入った土坑が発見され、今後復元するのが楽しみです。また、中津野遺跡は弥生時代終末～古墳時代初頭（1700年前）の「中津野式土器」の標式遺跡でもあります。今回の調査地区からは、その中津野式土器が大量に入った弥生時代末から古墳時代初期の溝も発見されました。近世では、カマド跡が2基発見されました。そのうち1基は周りを掘立柱建物跡が囲っており、カマド小屋のような施設であったと予想されます。さらにその南側には母屋と考えられる大型の掘立柱建物跡があり、大変興味深いです。



図1 中津野遺跡の位置

表1 中津野遺跡で見られる地層

層	色調	時代	層厚
I	表土		
II a	黒褐色土	近世～弥生前期	20 cm
II b	黒色土		25 cm
III a	茶褐色土	弥生前期～縄文後期	10 cm
III b	黄橙色土	縄文後期	20 cm
III c	黄橙色火山灰土		ブロック
IV	褐色土		10 cm

表2 主な遺構と遺物

時代・年代	遺構	遺物
縄文時代晩期～ 縄文時代後期		指宿式土器，市来式土器，晩期の土器 石皿，磨石，石鏃，フレイク，チップ
弥生時代前期	土坑 6基	高橋式土器，入来式土器 石皿，磨石，石鏃，打製石器，磨製石斧，石包丁
弥生末～ 古墳時代前期	溝状遺構 1条	中津野式土器
古代・中世	溝状遺構 1条 大型土坑 1基	青磁，白磁，土師器
近世	掘立柱建物 6軒 カマド跡 2基 溝状遺構 5条 大型土坑 2基	薩摩焼

7 中津野式土器について

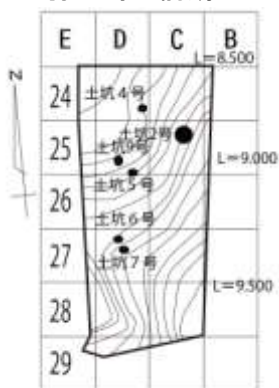
中津野遺跡は中津野式土器の標式遺跡です。中津野式土器は、主に弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけて作られた土器です。昭和 25 (1950) 年に宅地に隣接する一段高い畑地を 1 m 余り掘り下げたところ、一角から多量の土器が出土しました。地主は南日本新聞社に調査を依頼、同社から委嘱された河口貞徳氏が調査を行ったところ多くの完形土器を発見しました。

壺形土器は大型の楕円形胴部に外へ開いた口縁部がつき、胴部に一条の絡縄凸帯を巡らした丸底の土器です。甕形土器は、胴部から頸部へ締めり、口縁部へ外反する、中空の脚台のつく器形です。



8 発掘速報

(1) 弥生時代前期



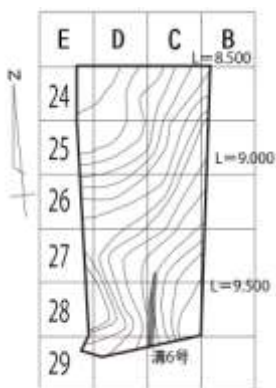
コンターはⅢa層上面



土坑 4 号

長径 190 cm
短径 140 cm

(2) 弥生末～古墳時代前期



コンターはⅢa層上面



溝 6 号

長さ 18m以上
幅 110 cm
深さ 70 cm

(3) 近世



(1 グリッド 10m×10m)



掘立柱建物
跡 1 号

カマド 1 号

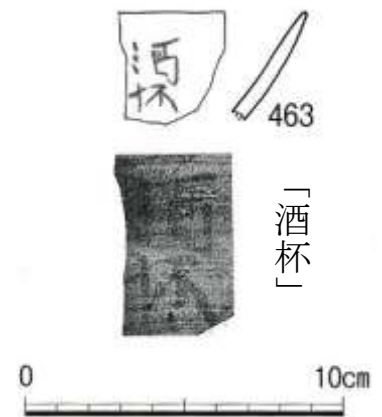
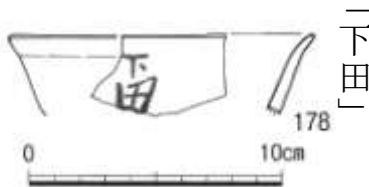
掘立柱建物
跡 2 号

報告書の成果

永濱 功治（南の縄文調査室）

かわかみじょうあと 川上城跡（鹿児島市川上町）

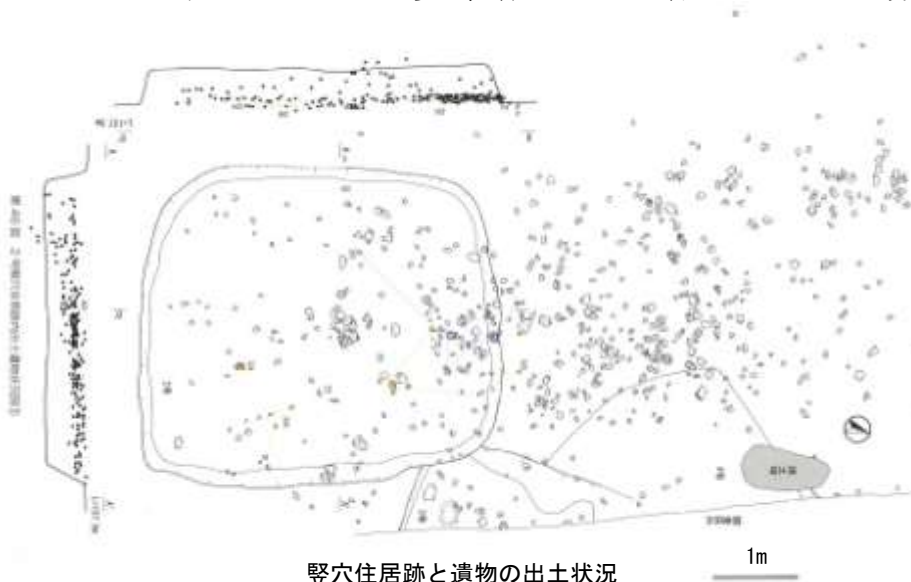
川上城跡は鹿児島市街地から北西へ約7kmの吉田インターチェンジ近くの遺跡です。標高約150mに位置し、中世の山城として使われる前（古代）の遺構や遺物が多く出土しました。掘立柱建物跡3棟や畝の痕跡、炉跡とよばれる火を使った跡も見つかりました。遺物は平安時代前半（9世紀中頃）の土師器と呼ばれる素焼きの土器が多く見つかり、中には土器の表面に墨で文字を書いた「墨書土器」と呼ばれるものも見つかりました。その中には「下田」と書かれた墨書土器もありました。川上町の隣は下田町で、古くからその地名で呼ばれていたことが分かります。また、河川周辺の低い土地には現在も田園地帯が広がっています。他には越州窯青磁と呼ばれる中国産の磁器や緑釉陶器と呼ばれる貴重な遺物も出土しました。



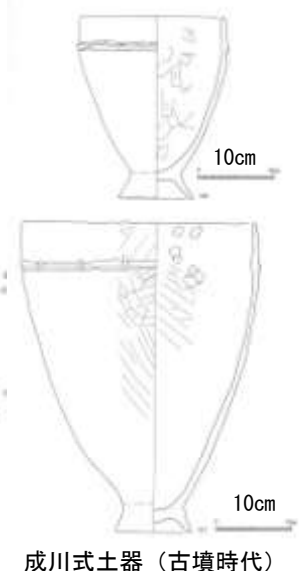
いなりやま ちんじゅやま 稲荷山遺跡・鎮守山遺跡（鹿屋市）

稲荷山遺跡では縄文時代晩期（2,800年前）及び古墳時代（5～6世紀）の竪穴住居跡が見つかりました。古墳時代の竪穴住居跡は5軒のうち3軒は部分的に重なって見つかり、同じ場所で建て替えられていったことが分かりました。

鎮守山遺跡では古墳時代の竪穴住居跡が20軒見つかりました。稲荷山遺跡同様、重なって見つかったものも多く、繰り返し建て替えていたことが分かります。



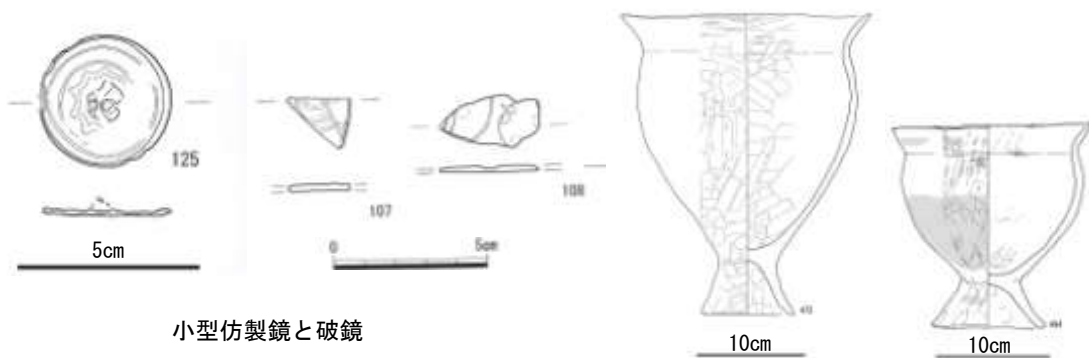
竪穴住居跡と遺物の出土状況



成川式土器（古墳時代）

しばはら
芝原遺跡（南さつま市金峰町）

芝原遺跡は万之瀬川中流の標高約4mの自然堤防上の遺跡です。縄文時代から近世までの遺構や遺物が多数見つかりました。縄文時代の調査では、中期（約4000年前）の堅穴状遺構と漁労具の一種である鋸歯状尖頭器が見つかりました。弥生時代終末から古墳時代初頭（3世紀頃）では、日本製の「小型仿製鏡」とよばれる鏡と中国製の鏡を分割した「破鏡」が発見されました。このような鏡の所有者はこの地域の支配者層の人々であったと思われます。また、完全な形に近い土器が集中して発見され、水辺の祭祀を行った場所ではないかと考えられます。古代では、「酒井」「福」「宅」などと書かれた墨書土器が多数発見されました。中世では大量の輸入陶磁器や国内産陶器が発見され、博多や坊津と並んで万之瀬川下流域は海外の貿易拠点であったことが分かりました。

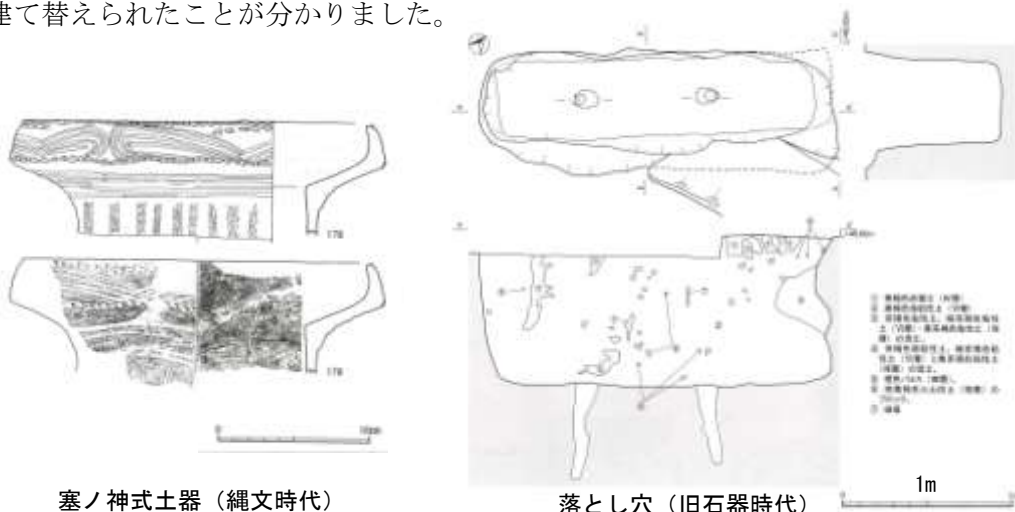


小型仿製鏡と破鏡

中津野式土器（古墳時代）

山口遺跡（薩摩川内市都原）

山口遺跡は川内川支流木場谷川、都川に挟まれた台地上にあります。西回り自動車道都インターチェンジ近くの遺跡です。主に旧石器時代と中世の遺物が多数発見されました。旧石器時代（約15,000年前）の遺物としては細石刃を製作した跡や落とし穴、礫群などが見つかりました。縄文時代早期（約7,500年前）の土器で、口が「く」の字に折れ曲がった特殊な塞ノ神式土器も発見されました。中世では掘立柱建物跡を中心に墓跡、土坑が4つのエリアに集中して見つかり、切り合いの関係から数時期にわたって建て替えられたことが分かりました。



塞ノ神式土器（縄文時代）

落とし穴（旧石器時代）

東日本大震災復興支援報告

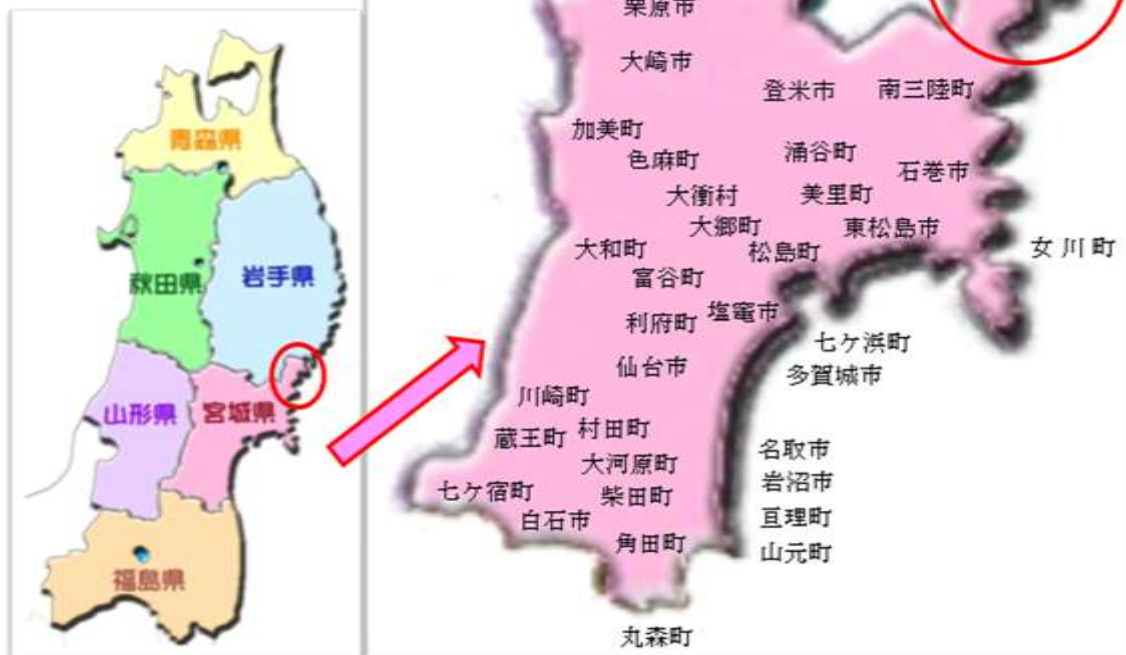
宮城県気仙沼市けせんぬましにおける震災復興支援

気仙沼市教育委員会生涯学習課文化振興係
主査 西園 勝彦

- 1 勤務地 気仙沼市魚市場前1-1
気仙沼市教育委員会生涯学習課文化振興係
- 2 派遣理由 東日本大震災復興支援（埋蔵文化財調査業務）
- 3 派遣期間 平成25年1月～現在に至る
- 4 主な業務 個人住宅等建設に伴う発掘調査ほか
- 5 職員体制 気仙沼市職員 2名
気仙沼市再任用職員 1名
気仙沼市任期付職員 1名
気仙沼市支援職員 2名
(西園、松山市文化スポーツ振興財団職員 1名:10・11・12月)
宮城県任期付職員 1名
宮城県支援職員 5名程度
※ アンダーラインが震災復興のための増員
太字が宮城県外からの支援職員

気仙沼市の位置

宮城県の東北端で、
岩手県へ突き出ている部分



気仙沼市での埋蔵文化財の復興支援の内容

- ★ 住宅を地震や津波で失った方が個人で高台に住宅再建する際の発掘調査
おもな仕事
- ★ 防災集団移転（高台移転）、災害公営住宅建設のための発掘調査
応援でしている仕事
- ★ 農地復旧（除塩作業）などのための発掘調査
現在 なし
- ★ 地震や津波で失なわれた店舗、工場、アパートなどを高台に再建・新築する際の発掘調査
着任前にはありました
- ★ 公共施設再建、移転のための発掘調査
警察署・市立病院
- ★ 三陸自動車道（復興道路）のための発掘調査
宮城県主体

グレーに塗っているところが、これまでに携わった仕事です。
★印のところが件数・日数の多い主な仕事です

厳冬期の調査



極寒の日は、地面が10cmほど凍っています



平成25年1月から10月に調査した遺跡

日付	遺跡名	起因	時代	遺構	遺物	内容
平成25年1月17日	高谷 たかや	個人住宅建設	縄文時代前期	なし	土器・石器	B
平成25年2月6～8日	旭岡 あさひおか	個人住宅建設	縄文時代前期	なし	なし	
平成25年2月7日	星谷 ほしや	個人住宅建設 浄化槽工事立会	縄文時代前期	なし	土器	D
平成25年2月14～19日	三島古墳群 みしまこふんぐん	個人住宅建設	古墳時代	古墳 新発見	なし	C
平成25年2月21日	南最知城跡 みなみさいちじょうあと	個人住宅建設	中世城館	なし	なし	
平成25年3月7～8日	磯草貝塚 いそくさかいづか	個人住宅建設	縄文時代前期	なし	縄文土器	B
平成25年3月7～9日	南最知貝塚 みなみさいちかいづか	個人住宅建設 私道工事立会	縄文時代前期	なし	なし	
平成25年3月18～26日	高谷 たかや	個人住宅建設	縄文時代前期	貯蔵穴	土器・石器	A
平成25年4月3日	石兜 いしかぶと	市立病院建設	江戸時代	金探掘溝	なし	仙台藩
平成25年4月9～10日	圃の沢 はたのさわ	個人住宅建設	古代 9世紀	溝	土師器 ・須恵器	C
平成25年4月12日	古館貝塚 こだてかいづか	個人住宅建設 浄化槽工事立会	縄文時代 前期・中世	なし	なし	
平成25年4月15日	内の脇貝塚 ないのわきかいづか	個人住宅建設	縄文時代前期	なし	なし	
平成25年4月17～22日	田柄貝塚 たがらかいづか	個人住宅建設	縄文時代前期	なし	縄文土器	D
平成25年5月23～24日	堀合館跡 ほりあいたてあと	個人住宅建設	中世城館	なし	なし	
平成25年5月31日	河原崎 かわらさき	個人住宅建設	縄文時代	なし	なし	
平成25年6月17～21日	南最知城跡 みなみさいちじょうあと	中学校運動場建設 (仮設グラウンド*)	中世城館	なし	なし	
平成25年6月24日	高谷 たかや	個人住宅建設 浄化槽工事立会	縄文時代	なし	なし	
平成25年6月25～28日	三島古墳群 みしまこふんぐん	個人住宅建設	古墳時代	古墳	なし	D
平成25年7月9日	野々下 ののした	個人住宅建設	縄文時代	なし	なし	
平成25年7月30日	本吉平貝 もとよしひらがい	会館移設	縄文時代	なし	なし	B
平成25年7月31日	月立台 つきだてだい	個人住宅建設	縄文時代	なし	なし	
平成25年8月20日	小屋館跡 こやだてあと	神社参道補修	中世城館	なし	なし	
平成25年8月5日～10月	高谷 たかや	個人住宅建設	縄文時代	貯蔵穴	土器・石器	A

※ A:完全に発掘調査を終わらせる B:盛土をして遺跡を保護して発掘調査を行わない C:一部のみ完全に発掘調査+盛土をして遺跡を保護して発掘調査を行わない D:位置を変えて遺跡を保護して発掘調査を行わない

発掘調査・整理事業応援					
平成25年1月～平成25年6月調査終了	波怒葉館跡 はぬきだてあと	防災集団移転	縄文時代前期・中世城館	貝塚	土器・石器・土偶・櫛・釣針・マグロ解体痕跡骨

個人住宅の発掘調査

- ・個人住宅を建設しようとする土地が遺跡である時に発掘調査を行います
- ・短期間の調査から長期に及ぶ発掘調査があります
- ・これまでに約20件の調査に行きました
- ・4月からの問い合わせ件数 300超
- ・このほかにも発掘調査が必要かチェックしに行ったりもします



GPSで位置と標高を計測
※ 地盤沈下をしているため周りにある三角点を利用せず新たに測っています

気仙沼市での埋蔵文化財の復興支援 個人住宅建設



完全に発掘調査を終わらせる

高谷遺跡(たかやいせき)

縄文時代の集落跡・貯蔵穴(ちよぞうけつ)がたくさん見つかりました



盛土をして遺跡を保護して発掘調査を行わない

磯草貝塚(いそくさかいづか)

縄文時代の貝塚
新しい貝塚が見つかりました



一部のみ完全に調査 + 盛土して遺跡を保護して発掘調査を行わない

三島古墳群(みしまこふんぐん)

古墳時代～奈良時代
これまで知られていなかった古墳が見つかりました



高谷遺跡発掘調査

6軒の住宅を建てるために発掘調査をしています。縄文時代の貯蔵穴が、約40基見つかりました。どれも上部が無くなって下半分だけが見つかりましたが、理科の実験で使うフラスコのような形をしていると考えられるものです。

写真に重機が写っています。

発掘調査は、工事と発掘調査を同時に行えるように計画を立てて、遺構や遺物が出土しないところと発掘調査が終了したところから住宅を建てるための工事を行っています。



災害公営住宅・防災集団移転

はぬきだてあと
波怒棄館跡

防災集団移転 **応援でしている仕事**
6月に発掘調査を終了しました



だいのしたたてあと・だいのしたかいつか
台の下館跡・台の下貝塚

災害公営住宅・防災集団移転
現在発掘調査中 **少量の応援のみ**



東北での埋蔵文化財復興支援



復興道路建設のための発掘調査

- 三陸沿岸自動車道
- ▲常磐自動車道



★防災集団移転のための発掘調査

※個人住宅のための発掘調査

●被災文化財の修復のための発掘調査



石道の解体修理の状況（宮城県仙台市史跡仙台城跡）

発掘された日本列島展2013
特集 東日本大震災の復興と埋蔵文化財保護より

文化庁編 「発掘された日本列島展 2013」

特集 東日本大震災の復興と埋蔵文化財保護より

気仙沼市における震災復興支援(埋蔵文化財調査業務)で気付いたこと

違い

- ① 気候・風土・文化
当然のことですが、これらは日本全国様々です。
- ② 発掘道具
一部の発掘道具の違いを感じました。基本は変わらないので、おそらくどの県でもその土地や出土物にあった道具、言い換えれば地質・土質・掘る時代や遺構にあった道具を選択・洗練して使用しているためにそうなっているのかなと考えます。同じ道具でも名前が違うことがあります。
- ③ 土
土質も違います。気仙沼市では、これまで鹿児島県内で扱ってきたような厚い火山灰、サンゴの砂丘はありません。また、貝塚を触る機会を得ましたが、鹿児島では自分で調査したことはありません。
- ④ 調査法、遺構・遺物
これも基本は変わらないはずですが、なにか違和感を覚えました。今はほとんどありませんが、個人住宅等の発掘調査をした経験の不足からかもしれません。出土遺物の時代が分かりません。特に縄文土器。
- ⑤ 体制
これまで、発掘調査をしたことがない者同士が多数名集まって仕事をしています。初めての経験です。市役所というところでの仕事も初めてです。
- ⑥ 年度が替わると⑤を繰り返します。
「違い」はまだまだあるかとは思いますが、ここで記したことは、ストレスとなっているはずは、はずなのですが、肩こりがするくらいで、楽しく毎日過ごしています。
④～⑥は作業員さん達も感じ、ストレスとなっているのではないのでしょうか。
また、受け入れる側にもストレスがあるはずは、はずです。気仙沼市では、震災後様々な文化財の被災からの復旧も取扱い、埋文もあり非常に忙しく働いています。その他の県、市町村さんも同じではないでしょうか？

目標・課題

復興支援で発掘調査した遺跡の記録類は、報告書作成などの時、展示の時、図録作成の時などに自分が担当するとは限らず、遠く離れたところにいるはずである。

そのため、協議事項・内容、調査の流れや方法の取捨選択、複数枚にわたる図面のトレース、図面注記、写真の注記、各種台帳作成などに加えて小さなことでも記録を残しておくことが後々につながるのではないだろうか？

以後復興支援にあたる方に迷惑にならないようにメモを残し、整理整頓し、何か一つでも「まち」のためにできないかということを考えて、実践できるように頑張っていきたい。

私たちの東北復興支援の仕事は、一日でも早く、一軒・1本・1か所 etc でも早い復興・再建のためのお手伝いに加えて、「埋蔵文化財のために遅れた」と言われまいように頑張るといふことと、まちの過去を探る仕事であるということ念頭に頑張りたい。

復興は始まったばかりで本格的に始まるのはこれからです

復興支援報告 ～埋文だより 59号より～

2011年3月11日、東日本を襲った巨大津波とそのすさまじい惨状については、皆さんも記憶に新しいことと思います。私は現在、岩手県教育委員会で東日本大震災の復興に伴う調査支援にあたっています。このような支援は阪神淡路大震災の際に初めて実施され、今回も全国から20名の職員が東北被災3県（岩手10名、宮城9名、福島1名）へ4月から派遣されています。派遣職員は10月にさらに増員され、来年度以降も全国から派遣される予定になっています。

私が派遣された岩手県では復興班が組織され、地元職員とともに調査にあたっています。主な業務としては、復興道路関係の分布調査や試掘調査、高台移転に伴う試掘調査や本調査、さらに市町村支援などがあります。

復興道路関係の分布調査では、これまでに約120kmを踏査しました。クマを警戒しながら三陸の起伏のある山中を調べて回るのは大変ですが、緑豊かなブナの森や時々姿を現すシカやカモシカ、リスの姿が疲れを癒してくれます。

試掘調査では壊滅した集落で調査を行ったこともあり、全員で黙祷をしてからガレキが残る家の基礎横部分を掘ったこともありました。

被災されて仮設住宅に暮らす方々と一緒に作業することもあります。皆さん大変な被害にあ



被災地での試掘

いながらも、将来へ向けて力強く歩いていこうとされています。また派遣された我々を逆に気遣ってくださるなど、東北の方々の忍耐力と人情にふれると、頭の下がる思いがします。

震災復興に伴う調査なので、いろいろと大変な面もあります。岩手県は本州最大の面積をもち四国くらいの広さがあるため、被災地まで行くのに滞在先から100km以上あります。被災地で宿泊先を確保するのも一苦勞です。

また、調査に必要な重機や作業員が確保できないこともあります。しかし、岩手県の職員や全国から集まった派遣職員と知り合えたり、東北の豊かな自然・歴史・文化などを知ることができるのは貴重な経験です。



分布調査中

震災から1年半がたちました。少しずつ仮設の店舗等が増えてきているものの、被災地には未だにガレキがうず高く積み、倒壊した堤防、基礎だけの家々など荒涼とした風景が広がり、仮設住宅では今でも4万人の方々が生活しています。復興へ向けてまだまだ多くの課題がありますが、震災前よりも安心して暮らせる日が一日でも早く訪れることを願いながら、日々調査に励んでいます。

(平成24年度派遣職員 平 美典)

復興支援報告

～埋文だより 61号より～

私は、今年の1月から東日本大震災の復興支援のため、宮城県気仙沼市教育委員会で発掘調査などを実施しています。

このような支援は、平成24年4月から東北の被災3県（岩手県、宮城県、福島県）で実施されていますが、今年4月からは全国から、さらに多くの職員が派遣されています。派遣職員は全国の都道府県や市町村、企業の職員、埋蔵文化財関係の仕事で退職された方など様々です。

気仙沼市では、私を含めて4名の職員を増員し、宮城県教育委員会に全国各地から支援に来ている埋蔵文化財の職員の応援もいただきながら埋蔵文化財の発掘調査を行っています。

私の主な業務は、震災で住宅を失った方が住宅を再建しようとする場所が遺跡であった時に行う発掘調査です。その他、防災集団移転（高台移転）の場所が遺跡であった時に行う発掘調査の支援もしています。震災復興支援の発掘調査では、地元の職員や全国から集まった職員と知り合え、お互いの経験や知識、現在の発掘調査現場について話し合いを行うことで、調査方法などの勉強にもなり、東北地方の歴史・文化・自然などを知ることもできる貴重な体験です。

発掘調査は、気仙沼市在住の方と作業を行っています。中には勤め先が被災して失業した方や仮設住宅に暮らす方もいらっしゃいます。皆さん大変な被害からの復興を願いながら作業をいただいています。さらに、私たち応援に来ている職員の健康や生活も気遣ってください。東北の方々の辛抱強く、温かい心に触れるたびにこちらが励まされています。

厳冬の1月に気仙沼市に来てから5カ月が経ちます。雪が積もり、土も凍る気温の中での発掘調査からのスタートでした。東北の冬は厳し

く、初めての経験も多かったです。4月にはフキノトウが芽吹いて春の訪れを知らせてくれ、5月の連休には桜が満開となりました。



積雪の中での発掘調査

大きな地震と巨大津波が襲ってから2年余りが過ぎました。被災地に広がっていたガレキのほとんどが撤去されましたが、大変な被害を受けた地域では建物などの基礎がそのまま残っていて、まだまだ多くの被災された方が仮設住宅での生活を送り、港や鉄道、道路、工場なども完全な復旧を果たしていません。



発掘調査現場周辺の津波被害の状況

漁業で有名な気仙沼の町が活気を取り戻すには、もう少し時間が必要なようです。これからも暑い夏、紅葉の秋、寒い冬と東北の季節や自然を感じながら、一日でも早い復興を願って気仙沼での仕事に励みたいと思います。

（派遣職員 西園 勝彦）

※県立埋蔵文化財センターでは、東日本大震災復興調査支援に2名の専門職員を派遣しています。

北の縄文文化

岩手県教育委員会事務局(鹿児島県派遣)
埋蔵文化財担当(復興班) 平 美典

1 はじめに

鹿児島から東北に来てまず驚くのはその大きさです。面積は九州地方の約 1.6 倍、都道府県別の面積比較でも東北地方 6 県うち 5 県が上位 10 位内に入ります。その広大な地には太平洋側に北上山地と阿武隈高地が、日本海側には奥羽山脈が南北に連なっており、北上川・阿武隈川・雄物川・最上川などの全国的に知られた大河が多くの盆地や平野を作り出すなど豊かな自然が広がっています。三陸沿岸は日本を代表するリアス式海岸で、複雑な海岸線のすばらしい景観美が広がるとともに海の幸の宝庫でもあります。

四季の移り変わりがはっきりしているのも特徴です。東北の冬は厳しく、宮城県・福島県の太平洋沿岸を除いて全域が豪雪地帯で、最高気温が氷点下という日もあります。長い冬が終わると梅や桜、菜の花や水仙などが一斉に咲き、豊富な山菜など冬が終わった喜びを感じさせてくれます。梅雨が終わると三陸の沿岸部では、オホーツク海気団より冷たく湿った北東風が吹き、夏でも 20℃を切ることもあります。秋になるとブナなどの落葉樹がいっせいに色づき息をのむような美しさです。晩秋になるとサケが遡上し、白鳥の飛来が冬の訪れを知らせてくれます。日の出入りも極端で、夏の日の出は午前 4 時、冬の日入りは午後 4 時です。

このような豊かな自然とそれらが生み出す恵み、四季の移ろいは、東北地方に独自の縄文文化を生み出しました。今回は東北地方北部を中心に、南の縄文文化とは異なる「北の縄文文化」の一端をご紹介します。

2 縄文人の装い

(1) 衣服

衣服そのものの出土例はありませんが、青森市三内丸山遺跡や宮城県栗原市山王冢遺跡などで編布が出土しており、衣服としても利用していたと考えられます。

北海道恵庭市柏木川4 遺跡では縦り編技法を基本とした模様編みの布が出土しています。ヨコ糸をループ状に引き出したり、タテ糸の間隔を変えたり、穴状のすき間を編み込むなど数種類の模様編みが確認されており、高い技術をもっていたようです。北海道小樽市忍路土場遺跡・秋田県北秋田市漆下遺跡・山形県遊佐町小山崎遺跡などから、赤漆を塗った糸を巻き上げてボタン状にしたものが出土しており、衣服に縫い付けられたものと考えられています。



模様編みの布(北海道恵庭市柏木川4 遺跡)

(2) 装身具

北海道・東北地方の縄文遺跡からは多種多様な装身具が出土しています。土偶などから、縄文人が髪を結び櫛や耳飾りなどをしていた姿が推測できます。

装身具の多くは女性用と思われませんが、鹿角製腰飾りなど男性が身につけていたと考えられるものもあります。また、イモガイやオオツタノハなど伊豆諸島南部や南西諸島などを生息域とする貝を素材とした貝輪や装飾品も各地で出土します。それらの貝を模した土製品も出土するなど、北海道・東北地方の縄文人は、南海産の貝に強い憧れをもっていたようです。これらは身を飾るだけではなく、魔除け等の呪術的な意味合い、所属する集団や、シャーマン・リーダーといった社会的地位を示すことにも使われたのではないかと考えられています。

【装身具出土例(代表的なもの)】
①櫛(赤漆塗り)
青森県八戸市是川中居遺跡・岩手県盛岡市萩内(しだない)遺跡など
②髪飾り
青森県七戸町二ツ森貝塚・宮城県東松島市里浜貝塚など
③鹿角製腰飾り
青森県階上町寺下遺跡・宮城県東松島市里浜貝塚など
④歯牙製装飾品
青森県階上町寺下遺跡(イノシシ牙製腕輪)・岩手県宮古市崎山貝塚(オオカミ臼歯・サメ歯製垂飾り)・ 宮古市近内中村遺跡(クマ牙製垂飾り)など
⑤南海産貝輪(模倣土製品含む)
北海道伊達市有珠モシリ遺跡(イモガイ製貝輪)・岩手県軽米町長倉 I 遺跡(オオツタノハ貝輪形土製品)・ 秋田県北秋田市向様田遺跡(オオツタノハ貝輪形土製品)など
⑥ヒスイ製装飾品
青森県六ヶ所村上尾駸(2)遺跡(大珠)・青森県八戸市風張(1)遺跡(小玉)・岩手県紫波町西田遺跡(勾玉)・ 秋田県北秋田市向様田D遺跡(勾玉)など



赤漆塗り櫛(青森県八戸市是川中居遺跡)



鹿角製腰飾り(宮城県東松島市里浜貝塚)

3 縄文人の食文化

(1) 採集活動

縄文人の主食は植物性食料で、なかでもクリ・トチ・ドングリ・クルミといった堅果類は、特に重要な食料であったと考えられます。

青森市三内丸山遺跡や青森県階上町寺下遺跡などでは、集落周辺でクリが管理・栽培され

ていた可能性が指摘されています。他にヒエ・アワ・キビ・ダイズ・ゴボウ・シソ・アサなども栽培されていた可能性があります。

トチやドングリなどの渋みの強いものは、アク抜きのために水さらしや煮沸などの処理を要しますが、青森市近野遺跡や青森県八戸市是川中居遺跡では、アク抜き施設と考えられる水場遺構とトチの実を集積したトチ塚が見つかっています。青森市小牧野遺跡で石器組成を検討した結果、湧水域での磨石類の比率が高いことが明らかとなりました。磨石は堅果類を砕き、粉にするのに用いた石器です。これらのことから水場遺構周辺で皮むきやアク抜きなどの作業が行われたと考えられます。



水場遺構(青森市近野遺跡)

青森県むつ市熊ヶ平遺跡、岩手県一戸町馬場平2遺跡、秋田県大仙市上ノ山遺跡、山形県高島町押出遺跡、福島県二本松市上原遺跡など、東北地方では加工食品炭化物が各地で見つかっています。アク抜きされたトチやドングリなどは、製粉した上で肉などを混ぜ、クッキーのようにして食べていたようです。

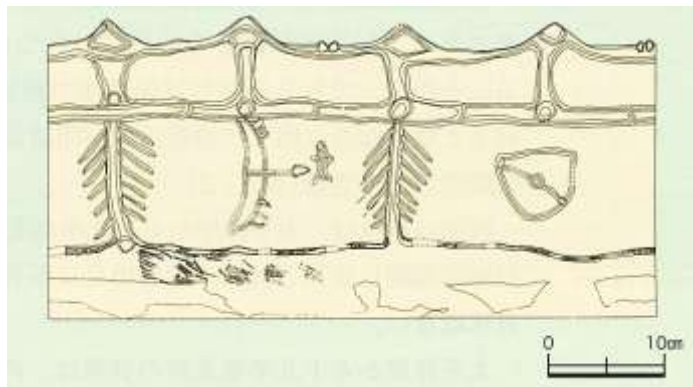
また、青森県青森市三内丸山遺跡や秋田県大館市池内遺跡などからはニワトコの種子が大量に発見されており、酒を造っていた可能性も指摘されています。

根茎類などの採集道具として考えられる打製石斧は、東北地方北部では出土遺跡が少ないようです。青森県青森市三内丸山遺跡や青森県八戸市是川中居遺跡などから根茎類の採集に使用したと想定される掘り棒が出土しており、木製品等を使用していたと思われます。その他にはキノコを模したキノコ形土製品が出土することから、縄文人にとってキノコも身近な食物であったと考えられます。

食料の保存には貯蔵穴が利用されました。フラスコ形・円形・楕円形などがありますが、集落では居住域とは別の空間に貯蔵穴が設けられており、ムラ全体で計画的に保存した様子が窺われます。このほか、竪穴住居の炉上に設置した火棚も利用されたと考えられます。青森市三内丸山遺跡から、ヒバの樹皮を網代編みにした袋状編み物が出土しています。編み物の中からクルミの殻が見つかっており、採集した木の実を入れていたようです。植物を利用した編組製品や土器などが貯蔵容器として用いられていたと考えられます。

(2) 狩猟活動

縄文人にとって、狩猟は主要な生業でした。北海道南部～北東北地方では、土器の表面に狩りの様子が描かれた狩猟文土器が出土します。青森県八戸市葦窪遺跡のものには獲物と弓矢と落とし穴が描かれており、追込み猟によって獲物を落とし穴に追込み、抜け出せなくなった獲物を弓矢で仕留めるといった、狩りの様子を知ることができます。



狩猟文土器(青森県八戸市葦窪遺跡)

シカ・イノシシの骨の出土がもっとも多いですが、クマ・オオカミ・タヌキ・キツネ・ノウサギ・イタチ・テン・ムササビ、ガン・カモ・キジなど様々な種類が捕獲の対象とされたようです。

狩猟方法としては槍・弓矢・落とし穴などが考えられます。石槍(尖頭器)は東北沿岸域の遺跡や北海道に多いようです。北海道ではオットセイなどの海獣類の骨が多く出土する傾向があることから、陸獣だけでなく海獣も対象になっていたと考えられます。

岩手県一関市貝鳥貝塚や宮城県気仙沼市田柄貝塚では、石鏃の刺さったシカやイノシシの頭骨や肩甲骨が発見されており、大・中型獣を対象に弓矢猟が盛んに行われたことを窺わせます。岩手県盛岡市科内遺跡では弓が、青森県階上町寺下遺跡では石鏃と矢柄をつなぐ根挟みが出土しています。根挟みの凹みにアスファルトが付着しており、石鏃と根挟みをアスファルトによって固定していたとみられます。

落とし穴は東北地方各地で多数見つかっています。岩手県花巻市石持Ⅰ遺跡で300基以上、現在発掘調査中の岩手県山田町豊間根新田Ⅰ遺跡では250基以上の落とし穴が検出されており、狩り場と思われる遺跡からはものすごい数の落とし穴が見つかることがあります。山の斜面だけでなく、河川近くの平坦な場所にも作られています。落とし穴のタイプとしては円形・楕円形・方形・溝形など



様々な形の落とし穴(岩手県奥州市宮原下遺跡)

があり、細長い溝形のは南九州では見られないタイプです。落とし穴の中には獲物の動きを妨げる逆茂木を立てたと考えられるものもあります。

青森県七戸町二ツ森貝塚,岩手県大船渡市下船渡貝塚,宮城県気仙沼市田柄貝塚などからはイヌの骨が見つかっています。猟犬などとして飼われていたようです。青森県階上町滝端遺跡では土坑に埋葬された2頭のイヌがみつかり、大切にされていたことがわかります。

その他に青森県弘前市十腰内遺跡など、動物をかたどった土製品が各地で見つかっています。多いのはイノシシで、他にクマやオオカミ、イヌなどが見られます。狩猟の成功や安全、動物への畏怖や感謝などを表現したものと考えられています。

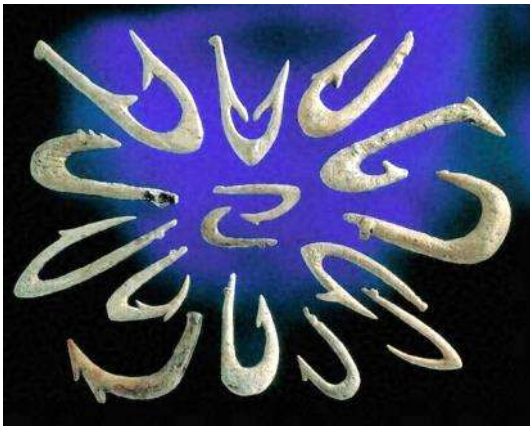


動物形土製品(左 イノシシ:青森県弘前市十腰内遺跡 右 クマ:青森県弘前市尾上山遺跡)

(3) 漁撈活動

漁撈も主要な生業です。釣針・モリ・ヤス・浮き・錘・タモ網杵などが出土していて、多様な漁が行われていたと考えられます。クジラ・イルカ・マグロ・サメ・カツオ・スズキ・ブリ・タイ・サバ・アジ・アイナメ・ウミタナゴ・マダラ・カレイ・アナゴ・イワシ・サケ・マス・ウニ・アサリ・トリガイ・イガイ・スガイ・レイシなどといった多種多様な魚貝類が捕獲対象となったようです。

逆刺(かえし)を錨のように両側に有する三陸沿岸特有の釣針や、基部が燕尾状にわかれた燕形離頭銚などがつくられました。このような銚で外洋性のアシカ・マグロ・イルカなどを捕獲したと考えられます。ヤスはスズキ・クロダイなど沿岸水域を中心とした漁に、骨籠はアワビなど岩に貼りついている貝の採集や貝をあけるために用いられたとみられます。網漁には石錘が用いられました。



様々な釣り針(宮城県石巻市沼津貝塚)



燕形離頭銚(宮城県石巻市沼津貝塚)

河川や湖沼などでの漁を示す捕獲施設としては、ウケ・ヤナ・エリといった仕掛けがあります。北海道小樽市忍路土場遺跡でウケが、北海道石狩市紅葉山 49 号遺跡でヤナが、岩手県盛岡市萩内遺跡でエリ遺構が見つかっており、内陸部でも、マス・アユ・サケや、ウナギ・カニなどを対象とした漁が盛んに行われていたと考えられます。

秋田県大館市池内遺跡からはブリ・サバ・ホシザメ・ヒラメなどの骨が見つっています。池内遺跡は日本海から直線距離で 50km 離れた内陸の遺跡です。同様に海岸から 10~20km 離れた青森県六ヶ所村富ノ沢(2)遺跡ではアシカやクジラの骨が、青森県南郷村畑内遺跡でもサメ・タイ・ヒラメ・カツオなどの骨が出土しています。海の魚を内陸にまで運ぶためには何らかの保存処理が必要なことから、乾燥・燻製・塩蔵などの加工技術があったことが推測されます。青森県階上町寺下遺跡や宮城県東松島市里浜貝塚などの太平洋沿岸の遺跡を中心に製塩が行われていたことがわかっています。

(4) 調理施設

調理施設としては炉が一般的です。地床炉・土器埋設炉・土器片囲炉・石囲炉などがあります。縄文草創期～早期には明確な炉を伴うものはほとんどありませんが、前半期は地床炉、後半になると石囲炉や土器を使った炉が作られるようになります。また縄文時代中期後半には、東北地方南部を中心に複式炉がみられます。複式炉は火を焚く場所が 2 箇所あり、石組炉と土器埋設石組炉、前庭部といったように炉が複合した形態をしています。比較的短期間に消滅することから特殊な炉であるといえます。



複式炉(岩手県大船渡市中野遺跡:今年度調査)



想定される複式炉の使用例(岩手県花巻市立博物館)

4 縄文人の集落

(1) 集落の施設と構造

東北地方の縄文時代の集落は、竪穴住居の他に大型住居、墓、貯蔵穴、捨て場、盛土遺構など様々な施設から構成されています。

岩手県一戸町御所野遺跡などから焼失住居が検出されており、竪穴住居の屋根は土で覆われていたと考えられています。建築材はクリが一般的であったようです。種類は様々ですが、住居内には基本的に炉が付属します。同じ場所に何度も住居の建て替えを行った遺跡も数多くみられます。

長さ 10mを超えるような大型住居は、長方形や長楕円形といった細長い形をしており、ロングハウスとも呼ばれます。単に大きいだけでなく、形態や柱穴の配置、炉の数と配置など一般の竪穴住居とは明らかな違いが見られます。三内丸山遺跡では長さ約 32m×幅約 10m、床面積 280 m²という巨大なものが見つかっています。建設には多くの労働力が必要であり、集落の中心



大型住居(山形県米沢市一ノ坂遺跡)

に作られていることから公共の施設である可能性が高いと考えられます。用途は共同作業所・集会場・冬場に共同生活を送るための施設といった説があります。

掘立柱建物は、4本柱の方形や6本柱の亀甲形(きっこう)のものが多く見られます。通常の竪穴住居とは異なる使い方をしていたとみられ、倉庫や遺体の安置所、葬儀のための施設などの説があります。

集落内には、土を高く盛り上げた場所が見つかることがあり、盛土遺構と呼ばれています。厚さは 20~30cm から 2m超、幅は 30~50mから 100m以上の大規模なものまで、大きさも形態もさまざまです。盛土の中からは、生活に関わる遺物のほか、祭祀(さいし)的な遺物、焼かれた動植物遺体などが出土したり、各層ごとに火を燃やした跡や焼土が見つかることから、自然の豊穰(ほうじょう)・再生を願ってモノの霊を送る「モノ送り」の場と考えられています。

これらの集落施設の配置は、東北北部を中心とした円筒土器文化圏では、竪穴住居・墓・貯蔵穴などを列状に、東南北部を中心とした大木式土器文化圏では、竪穴住居・掘立柱建物・大型住居・墓・貯蔵穴群を同心円状に配置するといったように、東北地方の北と南で異なった集落構造を見せます。

(2) 集落の変遷

草創期の検出例は少ないです。草創期末に青森県八戸市櫛引遺跡、岩手県花巻市上台Ⅰ遺跡などで竪穴住居や土坑が検出されていますが、集落の規模は小さかったと考えられます。

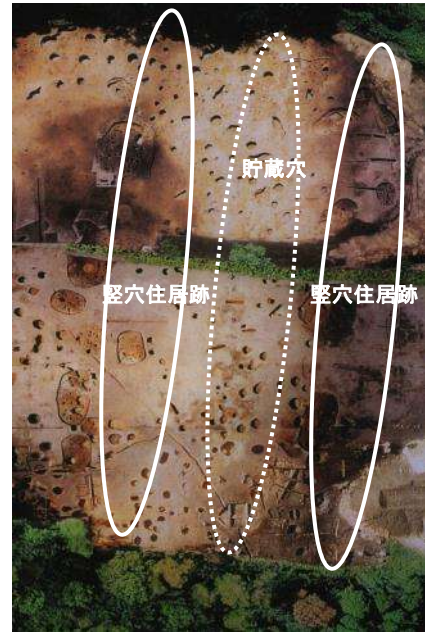
早期になると海岸近くや河川沿いに集落が現れはじめます。青森県おいらせ町中野平遺跡、岩手県二戸市長瀬Ⅱ遺跡などは大型住居を伴っており、拠点集落の萌芽と考えられます。

前期になると定住が促進され、100棟以上の住居跡や多量の貯蔵穴、墓地などで構成される大規模な拠点集落が形成されるようになります。岩手県遠野市綾織新田遺跡や岩手県奥州市大清水上遺跡、秋田県大館市上ノ山遺跡などは大型住居のみ環状に配置されています。一方で、東北地方北部に円筒土器文化圏、南部に大木式土器文化圏が形成され、北緯40度付近を境に南北で様相が異なるようになります。東北地方北部では、青森県八戸市笹ノ沢(3)遺跡のように、各施設が列状に配置される構造をもつ集落もありました。

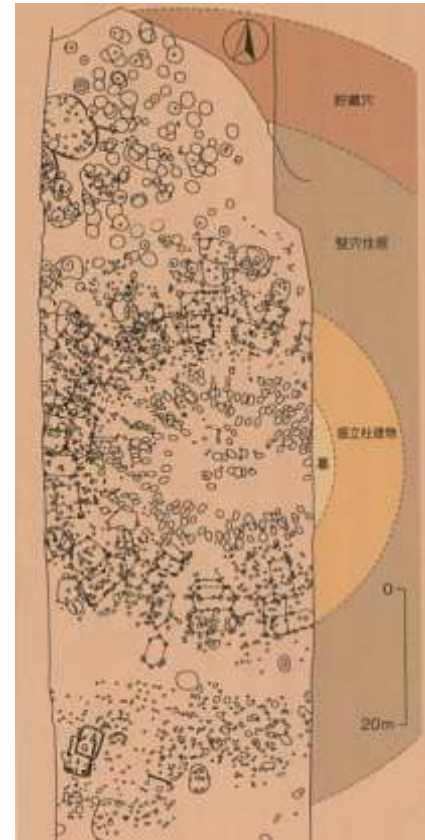
中期になると、東北地方南部では、岩手県紫波町西田遺跡のように、各施設が同心円状に配置される構造をもつ環状集落がみられます。一方で東北地方北部の円筒式土器文化圏は、中期後半以降になると大木式土器文化の影響を受けて独自性がなくなり、後期の初めには青森県八戸市風張Ⅰ遺跡などの東北地方北部でも環状集落が見られるようになりました。

後期になると気候は冷涼・湿潤となり、集落は急激に減少します。拠点集落が減り、大型住居も大半の遺跡でなくなります。集落は小規模化・分散化の傾向を示すようになり、それまで集落が作られない尾根筋や山間部でも見られるようになります。一方、各種の呪術・祭祀的遺物が増えるとともに、青森市小牧野遺跡や秋田県鹿角市大湯環状列石などの大規模記念物(モニュメント)が発展しました。

晩期は集落規模が縮小するとともに良好な検出例に乏しく集落の構造ははっきりしませんが、青森県六ヶ所村上尾駱(1)遺跡や青森市朝日山(2)遺跡のように、土坑墓



列状集落(青森県八戸市笹ノ沢(3)遺跡)



環状集落(岩手県紫波町西田遺跡)

が集まった集団墓地が集落外に形成される遺跡がみられます。

5 生活の道具

(1) 土器の種類と移り変わり

土器の発明によって食材を煮ることができるようになり、食べられる種類が増えるようになりました。土器はその後、保存用・盛付用・儀式用などさまざまな形が作られようになったほか、炉や棺に転用されたり、破片は錘などに再利用されたりもしました。

土器には時代や地域によって特徴がみられます。東北地方北部では、次のような土器の移り変わりが見られます。

最古の土器は、現在のところ青森県外ヶ浜町大平山元遺跡で出土した無文土器で、年代測定の結果、約 16,500 年前(補正で 15,000 年前)のものでされています。旧石器的な特徴をもつ石器群と一緒に出土しており、旧石器時代から縄文時代への移行期であることを示しています。

早期の土器は尖底であることが大きな特徴で、南九州の平底の土器とは大きく異なります。このような尖底土器は炉に突き刺して煮炊きしたとの説がありますが、明確な証拠はなく、どのように煮炊きに使用したのかは今後の課題です。胎土には繊維が混ざっており、小さな丸棒に線を刻みそれを回転させながら土器に押し付けたり、棒やへら、ハイガイ・サルボウ・アカガイなどの貝殻を使って文様がつけられています。

前期から中期の土器には円筒式土器があります。バケツのような円筒状のシンプルな形をした土器で、東北地方北部に分布の中心があり北海道南西部にまで及んでいます。縄文・撚糸文が土器全体にふんだんに使われ、なかでも撚った糸で文様を施した撚糸文は独特で、文様があらわすイメージから「網目状撚糸文」や「木目状撚糸文」などとよばれています。

東北地方南部では、縄文前期から後期のはじめにかけて大木式とよばれる土器が分布します。深鉢・浅鉢・樽形・注口土器など多様性があり、高さが 70cm を超える大形のものもあります。文様は下地として縄文が多用され、土器全体を横区切りに四つに区切り、それぞれの部分に特徴をもたせてつけられます。円筒式土器と大木式土器は北緯 40 度付近を境に互いに影響を及ぼしあいながら発展しましたが、中期後半になると大木式土器が東北地方北部にまで影響を与えるようになりました。



43

早期の尖底土器(岩手県野田村中平遺跡)



円筒式土器(青森市三内丸山遺跡)



円筒土器の特徴的な文様

後期になると、東北地方北部ではこれまでの土器とは大きく変化し、厚手から薄手に、大型から小型へと変化しました。形が多様化して壺・鉢・注口・香炉形・蓋など用途にあわせて作られるようになり、渦巻文などの文様が施されるようになりました。

晩期になると薄手で形はさらに多様化します。亀ヶ岡式土器と呼ばれ、大小の深鉢・浅鉢・鉢・台付鉢・片口・壺・德利・皿・椀・香炉形など精巧で豊富な器種が作られ、文様は雲形文など複雑で精緻なデザインが施されています。また、表面が綺麗に磨かれた土器や、現代の工芸品と見紛うほどの漆塗りの土器も作られるなど、洗練された美しい形と文様をもつのが特徴です。

亀ヶ岡式土器は東北地方一円に広大な分布圏をつくり、その影響を受けた土器は、北海道から西日本の一部にまで及びました。



大木式土器(岩手県盛岡市繫遺跡)



亀ヶ岡式土器の多様な器種(岩手県蒔前遺跡)



精緻で複雑な文様(岩手県岩手町豊岡遺跡)

(2) 石器

東北地方の石器は、狩猟具(石槍・石鏃)、動植物の切断や加工具(石匙・石篋)、孔をあけるためのドリル(石錐)、堅果類の皮むきや粉碎・製粉などの調理具(磨石・凹石・石皿)、木材の伐採・加工具(磨製石斧)、魚網や網み具の錘(石錘・軽石製品)、石器や骨角器などを製作するための工具(砥石・叩石・凹石)などの用途別に分けることができます。形態や出土量等にそれぞれ違いはありますが、大部分の種類は南九州と共通するものです。

東北地方の石器製作で特徴的なのは、磨製石斧の製作に擦切技法がみられることです。これは貴重な石材を無駄なく使う工夫として、石材の表裏両面に切断溝を設定し、板状の擦切具と研磨剤の砂、水を使って擦切る技法です。この技法で製作された石斧は北海道南部の遺跡で多くみられることから、津軽海峡を挟んだ技術交流が窺われます。

(3) 漆製品

漆の利用は縄文時代早期から始まり、前期に多様化します。青森市三内丸山遺跡などでは漆の種子や花粉が見つかり、ムラで漆の木を栽培管理し、樹液を採取していたことが明らか

になっています。漆は接着剤としても使われましたが、主に塗料として黒色や赤色の顔料を混ぜて使用しました。中でもベンガラや朱などの赤色顔料が好まれたようです。青森県八戸市是川中居遺跡などでは、漆器を製作する際に使用したと思われる赤漆を入れた土器や、漆の精製作業で濾し布として使用された編布^{あんぎん}が出土しています。

晩期の青森県むつ市亀ヶ岡遺跡・是川中居遺跡などでは、精巧な漆製品が大量に作られていたことが明らかになっています。漆塗土器や、飾り弓・耳飾り・櫛、腕輪などの木製品や骨角器に赤色や黒色の漆を塗ったものが見られるほか、木製容器に漆を塗った木胎漆器^{もくたい}や網組製品に漆を塗った籃胎漆器^{らんたい}も出土しています。



木胎漆器(青森県八戸市是川中居遺跡)



漆塗り土器(青森県つがる市亀ヶ岡遺跡)

(4) アスファルト

熱によって溶け、強い粘着力や水をはじく性質をもつアスファルトは、石鏟や銚先の固定、土器や土偶の破損部分の修復などに幅広く利用されました。アスファルトの産出地は日本海側にあり、秋田県潟上市槻木遺跡^{つきのき}は縄文時代のアスファルト採取地であったことがわかっています。

青森県八戸市沢堀込遺跡^{ざわほりこめ}からは前期初頭のアスファルト付着石鏟が出土しており、太平洋側でも早くから利用されていたようです。青森県つがる市亀ヶ岡遺跡・岩手県一戸町仁昌寺遺跡^{にしょうじ}・岩手県盛岡市川目A遺跡^{かわめ}などでアスファルトの入った土器が出土しています。



アスファルト塊とパレットとして再利用された土器片(岩手県一戸町御所野遺跡)

北の縄文文化

の道具と考えられる遺物が数多く出土します。また大規模記念物(モニュメント)も造られました。

(1) マツリの道具

①土偶

青森県つがる市亀ヶ岡遺跡^{しやこうき}の遮光器土偶に代表されるように、東北地方北部は土偶が非常に多く出土する地域です。ほとんどが女性像で、妊娠表現もみられることから、豊かな恵みや子孫繁栄を願うマツリに使われたと考えられています。青森市三内丸山遺跡のような板状のものや、青森県八戸市風張^{かざはり}1遺跡の合掌したもの、岩手県盛岡市萩内遺跡の本来は1mを越す大きさであったと考えられるものなど様々な土偶があります。壊れた状態で出土することが多いですが、破損箇所にアスファルトが付着し、接合されたと考えられるものもあります。



合掌土偶(青森県八戸市風張^{かざはり}1遺跡)

②土製仮面、耳・口・鼻形土製品

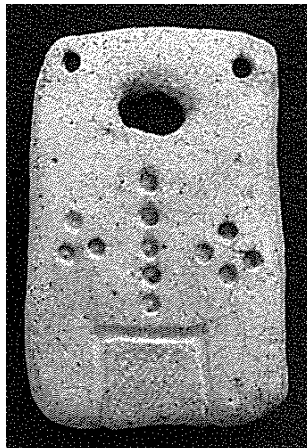
岩手県一戸町蒔前遺跡^{まくまえ}や秋田県能代市麻生遺跡^{あそう}などで土製の仮面が出土しています。上や横に穴があり、紐を通して顔などに付けていたものと考えられます。墓や墓域から発見されることがあり、特別な人物の葬儀に使用されたものと考えられています。岩手県盛岡市萩内遺跡・岩手県北上市八天遺跡^{はってん}などでは、耳・口・鼻形の土製品が出土しています。皮・布・木などに紐で縛りつけたと考えられる仮面のパーツで、後期の東北地方東部の遺跡から出土します。



耳・鼻・口形土製品(岩手県北上市八天遺跡^{はってん})

③土版・石版(タブレット)

長方形や楕円形をした粘土、もしくは石の板に模様や顔の表現を描いたもので、お守りや祈りの道具として用いられたと考えられます。岩手県軽米町大日向Ⅱ遺跡^{おおひなた}や秋田県鹿角市大湯環状列石^{おおいづせき}など、東北地方から関東地方にかけて作られました。



④手形・足形付土器

青森県六ヶ所村大石平遺跡^{おおいしひら}や岩手県滝沢村湯舟沢遺跡^{ゆふねざわ}などで手形や足形の付いた土製品が出土しています。これは粘土板に子どもの手や足を押し付けて焼いたもので、立ち祝いなどの

北の縄文文化

⑤青靑刀形石器・骨器



青竜刀形石器は、岩手県八幡平市長者屋敷遺跡・岩手県軽米町吠屋敷（かますやしき）I a 遺跡などの北海道・東北地方北部を中心に出土します。青森県七戸町二ツ森貝塚や岩手県大槌町崎山弁天貝塚出土品は鯨骨で作られています。用途は不明ですが、儀式や呪術の意味をもつと考えられます。

⑥ 鐸形土製品

岩手県盛岡市日戸遺跡や秋田県鹿角市大湯環状列石など東北地方北部から北海道南部を中心に鐸形土製品が出土します。鐸形で上には穴があいていることから、吊り下げて使用したものと考えられます。



青竜刀石器・骨器（岩手県八幡平市長者屋敷遺跡ほか）

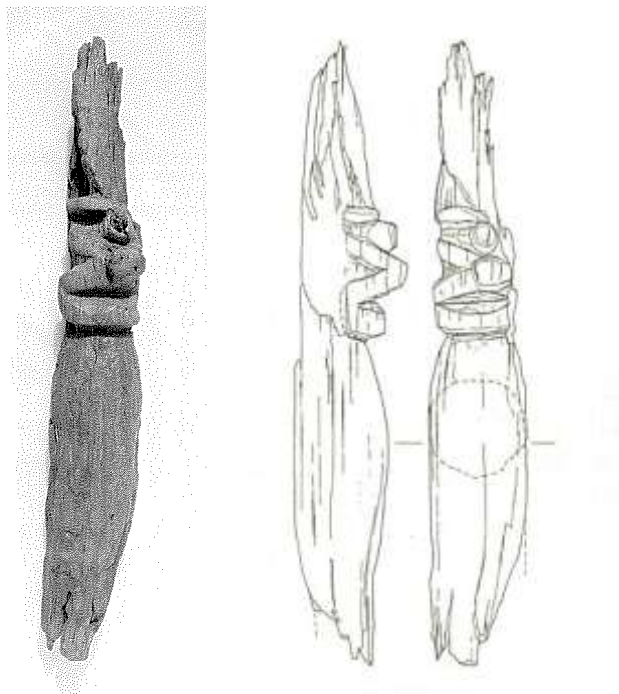
⑦ トーテムポール様木製品

岩手県盛岡市蔭内遺跡からは、人面を思わせる彫刻が施された木柱（トーテム・ポール）が見つかっています。左側の一部が欠落していますが、ほぼ全体を知ることができます。同様のものが石川県能登町真脇遺跡からも出土しており、マツリの場に建てられたのではないかと考えられています。

鐸形土製品（岩手県盛岡市日戸遺跡ほか）

(2) 大規模記念物（モニュメント）

北海道から東北地方北部の縄文時代後期を中心に、石を大きく円形に並べた大規模な遺構が見られます。これらは環状列石と呼ばれ、墓地説と祭祀場説があります。北海道森町鷺ノ木遺跡・青森市小牧野遺跡・青森県弘前市大森勝山遺跡・秋田県鹿角市大湯環状列石・秋田県北秋田市伊勢堂岱遺跡などが特に有名です。



トーテムポール様木製品（岩手県盛岡市蔭内遺跡）

環状列石には大きく二つの形態があります。一つは土坑の上に石を配した個々の配石墓が全体として環状にめぐるので、大湯環状列石の例があります。もう

一つは、小牧野遺跡のように円形の広場を囲むようにして形作られたもので、列石を構成する一部の組石には墓を伴うものもあります。大湯環状列石からは石組の下から土坑墓と思われる穴が

見つかっていますが、小牧野遺跡では環状列石の東隣に 100 基をこえる土坑墓が分布し、環状列石の石組下からは4基の再葬土器棺墓さいそうどまかんばんぼがみつかっています。また環状列石を有する遺跡では、土偶などの祭祀に関係する遺物が一般の集落遺跡と比べて多く出土する傾向にあります。環状列石の構築では、構築場所の土地造成や石材の運搬など大規模な土木工事が行われていますが、その作業量や規模にみあうほどの大きな集落はほとんどありません。このことから、環状列石の構築時や祭祀場としての使用に際しては、周辺の集落からも人々が集まっていたと考えられ、地域の人々の精神的なよりどころや祭祀活動の拠点であったことがうかがえます。



環状列石(左:秋田県鹿角市大湯環状列石 右上:青森市小牧野遺跡 右下:秋田県北秋田市伊勢堂岱遺跡)

7 東北地方の墓

東北地方の縄文時代の墓は、地面に穴を掘り遺体をそのまま埋めた土坑墓が一般的です。なかには墓穴の上部に配石や立石をもつ配石墓も見られます。埋葬方法としては手足を伸ばした姿勢の伸展葬しんてんそうもありますが、全般を通じて手足が折り曲げられた屈葬くつそうが主流です。

土坑墓とは別の墓として、青森県を中心とした北東北地方では、遺体を土器に入れて埋葬する土器棺墓どまかんばんぼと呼ばれる墓や、土坑の壁に



土坑墓(青森市三内丸山遺跡)

平石を貼りつけてその中に遺体を入れ、平石で蓋をした石棺墓と呼ばれる墓が縄文時代中期の終わりから後期の初めにかけてみられ、再葬に関連した墓と考えられています。再葬とは埋葬後に骨化した遺体を取り上げ土器棺にふたたび葬る方法で、一部の成人にとられた葬法のようなものです。土器棺墓は複数で出土することが多く、集落内に作られる通常の土坑墓とは異なり、集落から離れた場所に墓域が形成されます。石棺墓は主に青森県西部を中心に分布しています。石棺墓の配列に規則性が認められ、ある程度の距離をおくものの土器棺の墓域とともに検出されます。遺体はまず石棺墓に納められ、骨になった後に取り出され、専用の土器に入れられて再び埋葬されたものと考えられます。



石棺墓(青森県平川市堀合 I 遺跡)



再葬された土器棺墓(青森県五戸町薬師前遺跡)



土器棺墓での人骨出土状況

5 おわりに

豊かな自然の恵みを背景に、東北地方では南の縄文文化とは異なる「北の縄文文化」が形成されました。特に東北地方北部と北海道南部の地域は、津軽海峡をはさんだまとまりがみられます。「しょっぱい川」の異名をもつように、津軽海峡は両地域を妨げる場ではなく、海の道としての交流の場であったようです。この地域で生み出された多様な文化は、亀ヶ岡文化に代表されるように他地域へも大きな影響を与えました。

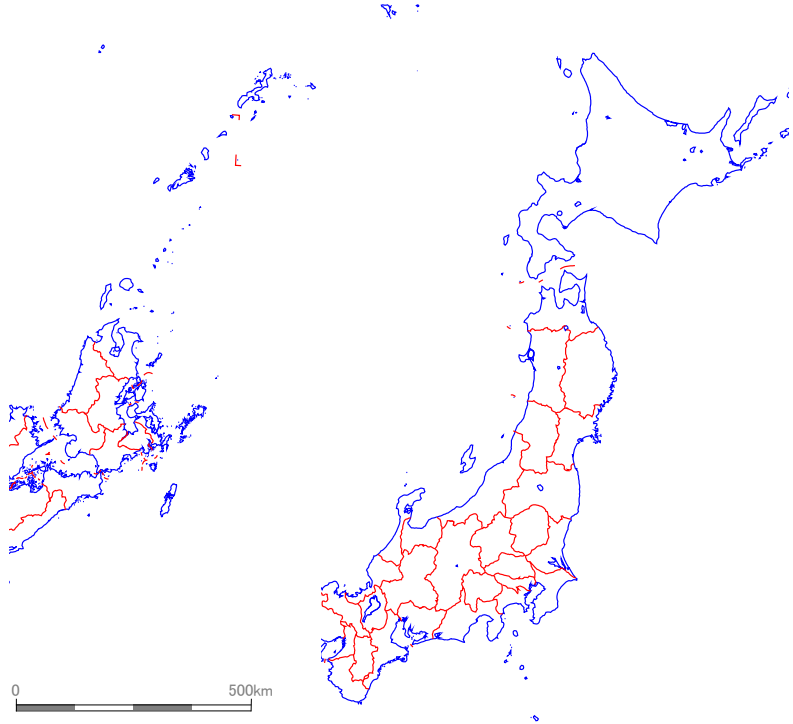
南の縄文文化と比較したときに特に印象に残るのは、豊かな自然の恵みへの感謝と再生への願いをこめたと考えられる遺物や遺構が多いということです。はじめにでも述べましたが、はっきりと四季の移り変わりが感じられるこの地域では、時が循環するという意識を特に強く感じさせます。このような意識が、再生に関する祭祀行為や環状集落や環状列石といった「円」という構造を生み出したのかもしれませんが。

南の縄文文化

東 和幸(調査課第一調査係長)

1 はじめに

九州にいと、東北地方の大きさは実感できません。県の数が九州本土7県で、東北地方6県であることから、面積も同じぐらいだろうと錯覚してしまうのです。鹿児島と青森は二つの半島からなっている点でよく似ており、お互いに触覚を出し合って、南北にアンテナを張っているのだと説明されます。しかし地図上で九州島をひっくり返して東北地方と並べてみると(右図)、その大きさの差がよく分かります。



地元の特徴を知るには、

地元だけを詳しく調べても明らかにすることはできません。他の地域と比較することによって違いが明らかになり、地元の特徴がみえてきます。その比較対象は、北部九州よりも遠方の東北地方と比較する方が、違いが鮮明になってくることは明白です。また、東西による違いよりも南北による違いの方が、緯度による気象条件が異なり、生活様式そのものの差異が表れます。

今回は、東北地方の縄文文化と比較することによって、南九州の縄文文化の特質を^{えぐ}り出してみたいと思います。

2 縄文人の装い

風雨に^{さら}晒され乾いた台地上では、有機質は腐ってしまい現在まで残ることはほとんどありません。水漬けにされたか炭の状態であれば、植物質や動物質の材料でつくられた道具は残らないのです。幸いなことに、縄文人が土器をつくる際に偶然敷いた布や敷物の圧痕があるため、当時の生活を垣間見ることができます。



編布編みによる衣服(想像図)

(1) 布

南九州では縄文時代晩期から弥生時代前期（3000年～2300年前）にかけて、組織痕土器と呼ばれる中華鍋形をした土器が見られます。土器を型どりしてつくる際、型から粘土をはずしやすいうように布状のものを敷いたのです。網目と編布が多くみられ、平織りや編組がわずかにあります。編布は、横糸を二本の縦糸でモジリながら編み上げていく手法です。縦糸の幅を変えることによってデザインにもなりますし、隙間の調節にもなります。尾関清子先生（2012『縄文の命』）の研究によると、鹿児島編布事例は突出して多く、縦糸の間隔が広いことも指摘されています。温暖湿潤な南九州では、風通しの良い服が合っていたようです。

(2) 装飾品

「縄文人は、ブレスレット・ネックレス・ペンダント・ピアス・ヘアピンなどをしていた」と言えば、驚く現代人も多いと思います。現在のおしゃれ感覚と違って、縄文人は自分の身体に邪悪なものが入ってこないように魔除けとして装身具を身に付けていたようです。

貝製の腕輪は、いちき串木野市市来貝塚や鹿児島市上福元町草野貝塚などで知られています。タマキガイやマルサルボウガイが素材として使われています。垂飾品は牙製や石製のものがあり、サメ歯を象った石製品も伊佐市大牟田遺跡で出土しています。獐猛な動物の一部を身に着けることによって、その威力を借りたのかもしれませんが、さすがに熊の骨は出土していません。縄文時代後期後半（3200年前）には、緑色の石材でつくる勾玉や管玉が流行し、南さつま市上加世田遺跡や出水市大坪遺跡で多く出土しています。全国に広まった北陸地方のヒスイほどの規模ではありませんが、九州山地で採れたと思われる緑色をした石材が西日本に流通しています。耳飾りは縄文時代早期後半（7500年前）から普遍的に見られ、縄文時代前期（5000年前）まで玦状耳飾りが存在します。玦状耳飾りは中国大陸にも似たようなものがあり、関連性を探ることが課題です。髪飾りとしては、垂水市終原貝塚や日置市吹上町黒川洞穴出土品などが知られています。

3 縄文人の食生活

(1) 植物食

ア 植物残滓

食料とした植物で最も多いのが、ドングリ類です。鹿児島の木の実はいちいガシなど、水さらしだけでアク抜きができるものです。また、最新の研究では土器の凹みにシリコーンを流し込んで元の形を調べるモデリング方法により、さつま町水天向遺跡の縄文時代後期終末（約3200年前）の土器に靱が付いていたことがわかっています。

イ 採掘痕

楕円形の土坑の一端がさらに深く掘られた例が、縄文時代以降でもみられます。これは、ヤマイモやクズの根を掘り出した痕ではないかと考えられています。秋になり葉を落として根に栄養分を溜め込んだヤマイモやクズは、いつの時代にも魅力的だったことでしょう。



ウ 道具

後期中半から弥生時代中期（3500～2100 年前）に多い石器として、扁平な打製石器があります。1つの遺跡で、100点超が出土することもあります。一方の端寄りに抉りがありますので、木の柄に縛り付けてズレないようにしていたと考えられます。土を掘ったり、均したりする手鍬のような道具が想定されます。大量の石製土掘具が必要なほどの土木工事跡はみられませんので、日常的に土を耕すなどしていたと思われま
す。今後、土器の種子圧痕や開聞岳の灰ゴラ直下の耕作痕で証明していく必要があります。

(2)動物食

貝塚や洞穴で出土する動物骨の中で大半を占めるのが、イノシシやシカです。食べるだけでなく、毛皮や脂肪分、それに骨角牙など捨てるところはないほど、利活用したと思われま
す。その他にも珍しい動物として、ジュゴンやオオヤマネコの骨があります。また、魚や貝の種類も非常に多く、これは海岸線が発達していることや鹿児島湾内が深くて外洋性の魚が入ってくるのが理由です。海と山が非常に近い鹿児島は、一年中、自然の豊かさに恵まれていたことに感謝しなければなりません。

(3)調理施設

燻製料理をつくる連穴土坑や石蒸し焼き料理のための集石遺構など、食に対して南九州の縄文人は食欲でした。これらは野外にある施設であり、集落の人々みんなが集まって開放的に食べていた光景が想像されます。



燻製料理

(4)生活用具

ア 狩猟具

食事をするには、まず食料となる素材を得なければなりません。動物の場合は、落とし穴や植物繊維を使った罠猟の他、弓矢を使った狩猟を行っていました。矢に付ける石鏃は、基部が凹んだ形がほとんどで、東北地方のように有茎のものはありません。石鏃の装着方法が違っていたようです。東北地方では天然のアスファルトを接着剤としていましたが、鹿児島での装着方法はまだわかっていません。

もう一つ南九州における石鏃の特徴として、磨いて作ることが早くから行われていました。「磨製石鏃が発達するのは弥生時代になってから」というのが教科書的ですが、種子島の三角山遺跡例などのように草創期（13400年前）からみられます。貝

殻を磨いてつくった貝鏃がモチーフになっていると指摘する研究者もいます。ここにも海との関わりがありそうです。

イ 漁労具

魚をとるのに網漁や釣りが行われていたことは、石の錘や角製の釣り針が出土していることから明らかです。網の資料としては、土器にスタンプとして残っています。網の目が5mmから37mmのものまでありますので、大きな魚からメダカまで捌えるような網を準備していたようです。

ウ 加工具

動物の解体には、石匙が使われていますが、骨を割ったりするには石斧も用いたと想像されます。東北地方の石匙が縦長であるのに対し、鹿児島県の石匙は横長が主体となる点が異なります。理由は分かっていませんが、動物の皮下脂肪の厚さと関係があるとしたら興味深いです。

植物質の加工には、石皿と磨石類が使われました。早期前半（9500年前）の石礮状になった磨石類と台形状をした石皿は特徴的です。また、後期前半（4000年前）に装飾性のある石皿が流行するのは、磨消縄文を伴った東側の文化の影響を受けたとも考えられます。

エ 煮沸具

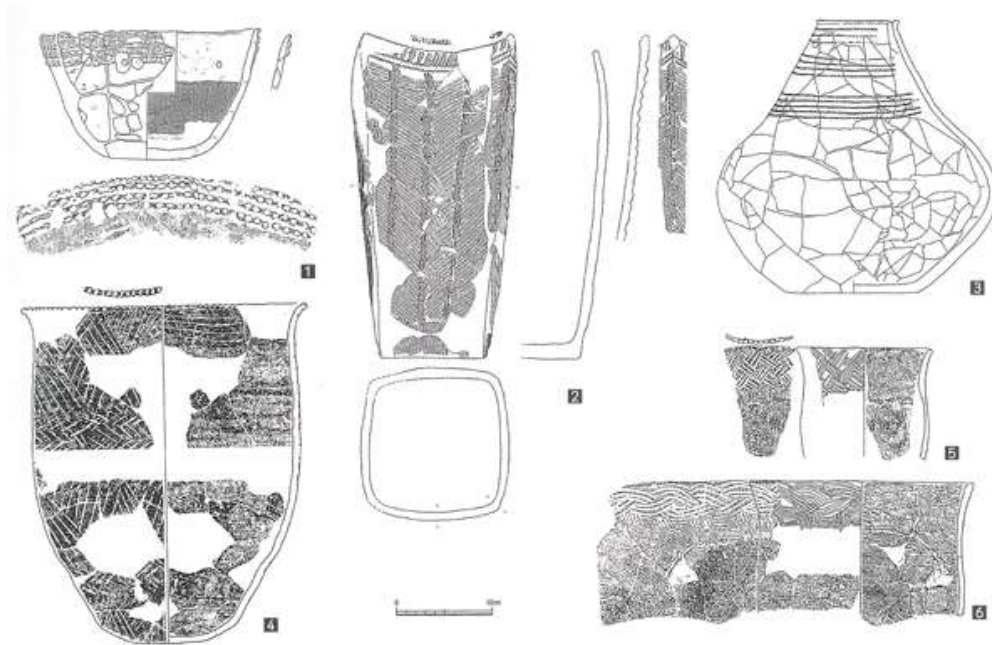
煮沸具としては縄文土器が主体となります。縄文土器が発明されたことによって、①食べ物を軟らかく煮ることができ、幼児や老人が食べやすくなった。②腐りかけたものや、アクの強いものも食べられるようになった。③他の食材と混ぜることによって多彩な味が生まれた。など、旧石器時代と比べて食生活が大きく変わったと考えられます。また、可塑性のある土器は、各地域や各時期によって形や文様などの違いが表れます。

(7) 土器の形

関東以北では、古い時代には深鉢形土器の底部が尖底もしくは丸底であり、新しくなるにつれて平底の土器が定着しました。また、晩期（3000年前）になると壺形土器や台付き鉢形土器などが加わります。一方、鹿児島県では初めから平底の土器であり、早期終末から中期初頭（7400年前～4800年前）にかけて尖底や丸底となります。さらに、壺形土器は上野原遺跡例のように早期後半（7500年前）にみられることが特徴です。後期（4000年前）になると台付き皿形土器が、晩期（3000年前）になると中華鍋形の土器が流行します。もう一つ忘れてならないのが、早期前半（9500）の、上からみて四角形やレモン形の土器です。それぞれの時期に、なぜ違った形の土器が出現するのか追究することも課題の一つです。

(イ) 土器の文様

縄文土器と言われながら、鹿児島県の土器は草創期（13400年前）から晩期終末（2700年前）まで、貝殻文が主流を占めます。縄を転がしたり（縄文）、刻んだ小さな棒を転がして（押し型文）文様を付ける全国的にみられる方法とは異なります。しかし、縄文時代を通して3回ほど縄文の波が押し寄せてきます。1回目が早期中半から早期後



南九州の土器

- 1 隆帯土器（鹿児島県中種子町三角山遺跡） 2 前平式土器（鹿児島県鹿児島市前原遺跡）
 3 塞ノ神式土器（鹿児島県霧島市城ヶ尾遺跡） 4 曾畑式土器（鹿児島県鹿児島市仁田尾中遺跡）
 5, 6 嘉徳式土器（鹿児島県奄美市下山田日遺跡）

半（8000～7500年前）にかけての、押型文土器や平椀式土器と塞ノ神A式土器の頃です。紐を巻き付けた軸を転がして文様を付ける、撚糸文もみられます。2回目が中期前半（4800年前）の船元式土器が入ってくる頃です。3回目が、磨消縄文が入ってくる後期前半から後期中半（4200～3500年前）の頃です。後期前半には巻き貝を転がした文様もみられます。これら3回入ってくる縄文土器の共通点は、渦巻き文を描いていることです。渦巻き文が、ワラビの新芽を象徴するのか、それとも脱皮を繰り返す蛇を象徴するのかは分かりませんが、北の縄文土器の源流にあることは確かです。

では、鹿児島の土器の文様は何が基本となっているかと言えば、植物繊維を編んだり組んだりした籠が見えてきます。曾畑式土器（5500年前）はもとより、前平式土器（9500年前）や嘉徳式土器（3500年前）も籠をモチーフとした文様として理解できます。

鹿児島に3回入ってくる縄文の波ですが、それぞれ塞ノ神B式土器（7400年前）、春日式土器（4500年前）、岩崎式土器（4200年前）など貝殻を使った文様に発展させています。外から入ってくる波を拒絶することなく、受け入れながらも独自のものに変えていく南九州の縄文人に、学ぶべきところが多くありそうです。

4 縄文人の住

(1) 住居

ア 竪穴住居

鹿児島で竪穴住居が発見される例は、早期前半（11000～9500年前）が主体であり、他の時期はそれほど多くありません。早期中半から後半（8000～7500年前）にかけては多くの遺跡で集石はあるのですが、竪穴住居はほとんど見つかりません。現在の我々の発掘技術が未熟なのか、それとも実際地面に残るような構造の住居ではなかったのか、両面を考えておかなければなりません。もし、竪穴住居がみられない時期があるとするれば、気候との関係をみていく必要があります。現在でも「住まいは夏を旨とす

べし」というように、温暖湿潤の鹿児島で半地下式の竪穴住居は不向きだったかもしれません。

なお、東北地方にみられる長さ 20m を越す大型住居を南の視点で見ると、雪深い冬を 1 軒 1 軒で過ごすよりも、数家族で暮らした方が燃料の節約にもなって良かったのではないのでしょうか。昼も夜も雪に閉ざされた、北の縄文人の知恵ではないかと思えます。

イ 洞穴

鹿児島県本土は火山活動による溶結凝灰岩の浸食洞があり、黒川洞穴（日置市吹上町）・日木山洞穴（始良市加治木町）・口輪野洞穴（霧島市国分）・中岳洞穴（曾於市末吉町）・片野洞穴（志布志市志布志町）などが発掘調査されています。種子島の阿獄洞穴には、弥生時代中期（2100 年前）の人々が暮らしていました。奄美諸島は隆起珊瑚からできており、鍾乳洞や岩陰を利用した面縄貝塚（徳之島伊仙町）・中甫洞穴（沖永良部島知名町）などが生活の場となりました。

自然の洞穴や岩陰は、雨露や台風などをしのぐには良好な場所です。しかし、湿気が高いので定住には不向きです。台風常襲地帯の南九州にとっては、自然の洞穴や岩陰が緊急避難場所としても有効だったと考えられます。

(2) 集落

ア 集落構造

縄文時代草創期（13400 年前）には、鹿児島市掃除山遺跡の例のように 2 軒の竪穴住居跡と舟形配石炉、それに煙道付き炉穴がセットで見られます。縄文時代早期前半（10000 年前）には、竪穴住居が「ハ」の字形に並ぶ傾向があり、連穴土坑と集石を伴います。縄文時代後期（4800 年前～3200 年前）も同様ですが、集落内には実用的な施設ばかりがみられ、モニュメントのようなものは無かったようです。

イ 道

早期前半（9500 年前）の道跡は、霧島市上野原遺跡や日置市伊集院町永迫平遺跡および上山路山遺跡で知られています。これらは、自然の小さな谷を利用したものであり、雨の時は水も流れていたようです。一方、日置市吹上町建石ヶ原遺跡では台地上に幅 260 cm で深さ 30 cm の凹みが 130m にわたり続き、道跡であると想定されています。底面に開聞岳の灰ゴラが堆積していることから、晩期終末ごろ（2900 年前）の道跡と考えられます。また、志布志市志布志町見帰遺跡でも後期末（3300 年前）の道跡と考えられる大きな溝状遺構が検出されています。海に面した鹿児島では、丸木船による移動も多かったと想定されます。



丸木舟造り(想像図)

(3) 道具

草創期（13400 年前）に、沖縄本島や種子屋久を含めた南九州では、丸ノミ形をした石斧が出土します。これ

は、丸木船をつくるための道具とされています。内陸部でも見つかっていますので、大木のある山で丸木船を加工したり、河川での利用もあったと考えられます。貝殻文土器の源流は、海に関係ある人々がもたらしたものであることを証明するきっかけが丸ノミ形石斧にあるのかもしれませんが。

5 その他

(1) 埋葬

人骨の残りが良くない理由もあり、墓として捉えられた例はほとんどありません。縄文時代後期後半（3400年前）になって現れる埋設土器についても、墓としての確証は得られていません。東北地方のように、祖先墓を中心に長い年月をかけて集落が円形につくられることもありません。縄文時代に限りませんが、南九州での埋葬方法は多様であり、謎に包まれています。

(2) 人骨

鹿児島島の土地は火山灰土壌であり酸性なので、人骨の残りは良くありません。市来貝塚や出水貝塚で出土しているぐらいです。身長がやや低く、抜歯などもないようです。ちなみに、現在の17歳男子の平均身長を比較すると、鹿児島は全国47都道府県中43位であり、縄文時代から続く伝統的なことなのかもしれません。なお、上位5位には青森県、秋田県、山形県の東北勢が入っています。

(3) 火山との関わり

霧島の御池、始良の米丸マール、桜島、開聞岳周辺、硫黄島付近の鬼界カルデラなど、縄文時代だけでもそれぞれの火山が何度か大爆発を繰り返しました。当時の人々にとって火山は大変迷惑だったかもしれませんが、黒曜石や鉄石英など石器をつくるための石材は火山の恵みによるものです。また、発掘調査をする我々にとっても火山灰のお陰で、①遺構や遺物をパックしており、残りの状態が良好である。②火山灰の色が異なるので、火山灰に掘り込まれた遺構を検出しやすい。③土器の年代前後関係の把握や遠くの遺跡との新旧関係を明らかにしやすい。など有り難い面が多いのも確かです。現在、全国にある1割の火山が集中している鹿児島で、歴史や文化を火山なしで語ることはできません。

(4) 呪術具

東北地方には多種多様で多量の呪術具がありますが、鹿児島では限られた種類しか無く数も多くありません。土偶に至っては、上野原遺跡（7500年前）、南さつま市金峰町芝原・渡畑遺跡（4500年前）、上加世田遺跡（3200年前）の3点しかありません。ただし、後期終末（3200年前）の軽石製岩偶はかなりの流行をみせ、弥生時代中期までつながる軽石製岩偶の源流ともなっています。石剣や石刀類も後期終末（3200年前）に十数例みられ、大崎町永吉天神段遺跡では5500年前の西日本最古の石剣が話題となりました。

南の視点から見ると、東北地方に呪術的な遺物や装飾性の高い土器が多いのは、四季にメリハリがあり、深い雪の中での時間がたっぷりあるからではないかと考えられます。自然の恵みに感謝する気持ちがより強く、長い冬を乗り越えるための知恵と工夫が多いことや、住居内で時間をかけた念入りな作業ができるからではないかと思われれます。

6 おわりに

平成 19 年に、福島県立博物館と鹿児島県歴史資料センター黎明館が合同で、「樹と竹」という民具を主体とした企画特別展を開催しました。（『樹と竹 一列島の文化・北から南から一』2007 年 鹿児島県歴史資料センター黎明館・福島県立博物館）重厚で装飾性に優れた北の民具に対して、南の民具は軽くて実用性を重視したものであることが浮き彫りになりました。百年経たなければ加工できない北の樹に対して、3 年もあれば材料に育つ南の竹に象徴されるように、気候の違いが生活文化に大きく影響を与えていることがわかります。これは縄文時代にも当てはまることで、北の装飾性の高い縄文土器や多彩で豊富な呪術具じゆじゆつぐ、大きくて長期仕様の住居などに対し、南の土器や遺構は即物的な印象を与えません。

ここ 30 年間における、岩手県盛岡市の年平均気温と年間降水量が 10.2℃と 1266 mmであるのに対し、鹿児島市は 18.57℃と 2265 mmです。この差は縄文時代もさほど変わらなかったと推察されますので、それぞれの植生や動物相を活かしながら、それぞれの気象現象に合わせた暮らし方があったと考えられます。それは、材質や動力が異なるだけで、少なからず現在にもつながっていることでしょう。突発的な自然災害への備えや現代社会の便利さの功罪を知るためにも、たまには携帯電話も電気水道も使わず、縄文人の気持ちに近づくと一時も必要なのかもしれない。



前原遺跡 縄文土器

用語集

遺物（いぶつ）・・・昔の人々が使った道具のことです。土器や石器、金属器など。

遺構（いこう）・・・昔の人々が残した生活の跡のことです。家の跡（**堅穴住居**）や調理場のあと（**集石**）など。

堅穴住居跡（たてあなじゅうきよあと）・・・昔の人々が住んだ家の跡のことで、地面に穴を掘り、柱を立て、**葦**などの植物で覆った住居の跡のことです。覆いは残っていないことが多く、色の違う土の範囲が見つかり、**堅穴住居**が発見されることが多いです。



集石（しゅうせき）・・・こぶし大の石を多数集めて加熱し、熱くなった石の上に肉などを置き、調理したと考えられている遺構のことです。



土坑（どこう）・・・地面に掘られた人為的な穴のことです。何のために掘られたか分からないものも多いです。

掘立柱建物跡（ほったてばしらたてものあと）・・・地面に柱を立てて作った建物の跡のことです。建物自体は残っていないことが多いので、柱の痕跡（色の違う丸い土の部分）が等間隔に見つかり、掘立柱建物跡の可能性がります。



石鏃（せきぞく）・・・石で作られた道具で、**矢尻**とも書きます。矢の先にひもなどで固定して使います。



〇〇式土器・・・時代や時期ごとに作られた土器の種類（**型式**）を表します。最初に出土した遺跡の名前が付き、その型式の土器が出土したら、遺跡の大まかな時代が分かります。（例：**成川式土器**→指宿市山川の成川遺跡で出土した土器で、古墳時代に多く作られました。）

炉跡（ろあと）・・・火を使ったあとのことです。土が赤くなっていたり、炭が残っていたりすると、炉跡だった可能性があります。

カマド跡・・・昔の人がご飯を炊いたりする道具をカマドといいます。そのカマドの跡の事です。

落とし穴（おとしあな）・・・獲物を捕るために掘った穴のことです。穴の底に、**杭**などを立てて、落ちた後、動けないようにしたとも言われます。

溝状遺構（みぞじょういこう）・・・溝のように線状に土を掘られた形跡があるものを溝状遺構といいます。道や側溝、何かの境界線だった可能性がある遺構です。

土師器（はじき）・・・古墳時代から平安時代にかけて作られた赤褐色の素焼きの土器を土師器といいます。

青磁（せいじ）・・・陶磁器の一種で、釉薬に含まれる鉄分が還元炎焼成（窯の中に空気を入れないように焼く方法）によって青く発色した焼きものです。ときに黄色や灰青色になることもあります。青磁といいます。

白磁（はくじ）・・・灰白もしくは、白色の素地に透明もしくは乳白色、白色の釉薬をかけて高温で焼き上げた焼きものです。

細石刃（さいせきじん）・・・石器のなかでも、細石器と呼ばれる非常に小さい石器の一種です。幅約 2mm～1cm、長さ約 2～5cm の大きさの石刃を細石刃といいます。そして、それを動物の骨や木に埋め込んで槍のように使っていたと言われています。



細石核（さいせきかく）・・・細石刃を作るために削った石の残った部分を細石核といいます。細石核をみれば、どのように細石刃を作ったのかが分かります。そして、この作り方は、地方や集団によって異なります。



磨石（すりいし）・・・石皿と一緒に使うことの多い丸い石で、木の実を敲いたり、粉を挽いたりする時に使う石です。要するに、杵のようなものです。



石皿（いしざら）・・・石の皿といますが、磨石と一緒に使うことの多い臼の役割をする皿状の石です。

敲石（たたきいし）・・・木の実をつぶしたり、石器などを作る時に使う石です。



時代区分と年代値



半年表の間隔は便宜上、調整してあります。

